



溶解と気化における熱量とエネルギーの考察

令和6年7月17日

黒田 毅

エネルギー量における形態の変化という現実において、結合力の形成が、電子数における判断とともに、その気化と溶解における数学的考察を求めるとき、エネルギーにおける変化が現実を支配すると定義できるのである。

これらはエネルギー量の拡大における熱量の増加は、個別原子活動の変化において形態の変化を与えるものである。

これら数値化されたこれら現実への考察は、一定エネルギー下における状態の変化を有するものであり、 $E=mc^2$ $m=E/c^2$ という定式における、新しい判断を求めるものである。

これらがエネルギーと物質の相関性への問いかけであり、もしビックバンがエネルギーの放出であるならば、物理存在がエネルギーの形態の変化に過ぎないという仮説は成立するのである。

また極性における中心を挟んだ、エネルギーの存在は、その中心への力の形成を与えるものである。これらが、ビックバンがエネルギーの創出であると仮定するとき。ゼロという中心からその極性ととともに最大までの拡大を行うものであると仮定できるのである。プラスとマイナスにおけるこれら現実は、双方においてその最大の許容性をその制限性として有すると考えられる。

これらは相極性における双方のエネルギー量は、合算するときゼロになるものであると考える。これがゼロの解放におけるビックバンへの考察である。

これらはまたビックバンにおけるエネルギーが無限でないことを説明するものであり、これらエネルギーの定数は、ゼロという存在への考察を可能とできるものである。

また力の形成は、反発性でなく、中心への回帰であり、中心に与えられる重力と作用性は、ビックバンの形成の力と同じであると判断するものである。

これらは相反する力が中心に向かい存在することなのである。これらはゼロのバランスの崩壊であるという仮説は可能である。



それにおいて、 $E=mc^2$ という定式における c^2 という存在への考察が可能なのである。これは力とエネルギーにおける総数は、プラスとマイナスで足すことゼロとすることは、ゼロから始まる宇宙の説明を提案するものであり、 $E-mc^2$ という定式において、エネルギーの放出がビックバンであるならば、エネルギーが全ての物質を形成すると定義できるのである。 $m=E/c^2$ という定式においてその物理形成が説明できるならば、 c^2 という存在への考察は求められる。

これらは中心というゼロの存在、これらにおけるゼロの崩壊とそのアンバランスにおける相反するエネルギー性と c という一定速度の現実への考察などが、これら説明へ提起できるものである。

これらにおいてエネルギーが振動であるならば、共有の変化という現実が物理存在において存在し、それが時間を形成すると定義できるのである。時間の停止が特殊相対性理論における光での移動においてゼロになるという定説は、 c という共有変化が時間を形成すると定義できるのである。

上記事項は、 c の形成と一定性への考察をまた可能とできるものとする。これら現実が空間の形成とその拡大をエネルギーの拡大とバランスの形成において有するということを提案するのである。空間の拡大はそれにおいてそのバランスの形成をもつて終焉すると考えることができるのである。

エネルギーが振動であるならば、その働きは力の形成を与えると考えられる。これが、その形態を有することや新たな運動性の構築において全ての力の形成を行うという仮説を提起するものである。

これらは大統一理論と全ての物理現実への考察であり、近代物理学における発展の基盤として自己考察を提起するものである。